

身体のエコノミー

— コードの体系における「交換」と「剰余」について —

荒谷大輔*

1. 交換と剰余

交換における等価と不等価の問題と剰余

本論の課題は、コードがコードとして機能し、「相応」のものが「相応」な位置づけを与えられる状態を「幾何学的等価」と捉え、そうした、いわば社会的な「等価」が成立する際の身体のある方を、「剰余」の問題に焦点を当てつつ問い直すことにある。

「剰余」の問題とは、通常、「等価」であることを前提に行われる「交換」に深く関わるものと考えられる。それはよく知られた、次のようなアポリアの定式によって表現されよう。すなわち、「交換」とは、その前提において、交換されるもの同士が「等価」であることを含んでおり、交換が「不等価」であることは、その形式上ありえないが、にもかかわらず、交換されるもの同士が真に「等価」であるならば、そもそも「交換」を行う動機が説明されない、というものである。極めて形式論理的に取り出された矛盾ではあるが、こうした交換を巡るアポリアは、交換における「剰余」の問題を指し示すことにおいて、なお重要であるといえる。つまり、「剰余」とは、形式上「等価」として成立する「交換」において、その「交換」を促したはずの潜在的な「不等価」を指し示すものであることになるのである。

歴史上、こうした隠された「剰余」の問題に注目したのが、他ならぬマルクスであった。マルク

スは、商品の取引によって発生する「剰余」を欺瞞的なものと見なし、そうした「手品」が労働者の能力に適応される仕方を、資本家による労働の搾取と考えた。そして、そのように搾取された剰余を取り戻すことを、労働者による革命の目指すところとしたのである。ごくごく簡潔に描かれたイラストレーションであるが、しかし、このように理解される限りでのマルクスの「論理」が、今日全く力を失っていることは否定できない。ごく簡単にいって、取り集めた材料をある商品へと加工し、付加価値を発生させることは、材料の調達費に対する不当な利益の上乗せであるよりも、むしろ、企業家の側の「努力」の成果とみられてしかるべきであり、マルクスのいう「手品」は、今日、ある種のイデオロギーを前提にはじめて、「手品」として現れるものであるように思われるのである。

しかし、仮にマルクスの「共産主義」の図式が社会的な説得力を失ったとしても、「等価」として現出するものの背後に潜在する「剰余」についての彼の思索の意義が失われたわけではない。本論では、マルクスの問題を引き受けつつ展開されたドゥルーズ＝ガタリの論考に基づきながら、「等価なもの」に原理的に内在する「不等価なもの」の存在様態について、詳細に検討していくことにしたい。そうした分析は、また、必然的に身体に対する社会化の構造を検討するものになるだろう。『資本論』に先立つ『経済学批判要綱』においてマルクスは、「資本主義に先行する社会態」の分析を行い、経済の下部構造が、表象の次元において語られる構造の背後に社会の様態を決定す

2006年1月18日受付

* 江戸川大学 人間社会学科講師

ることを論じていた。そうしたマルクスの唯物論的な社会形態についての論述を引き継ぎながらドゥルーズ＝ガタリは、社会がコード化される過程でコード化を促し、コード的な等価が成立した後には隠れてしまう「剰余」について検討を加えたのである。本論は、そうしたドゥルーズ＝ガタリの論考に依りつつ、コード化される過程での身体の有り様を切り出していくことになる。ひとつの身体に対して社会のコードが刻まれる際、そこにはいかなるエコノミーがあるのか。それを問いただすことが本論の課題であるのである。

しかし、まずは、「交換」という事柄自体について、もう一度明確な規定を与えておくことにしよう。

「交換」という外見

すでにヒルファーディングが指摘していたように、「交換」とは、それに参与する二つの主体が「個人」として分断されている状況においてはじめて、問題となるものである。

確かに社会主義社会でも交換は行われるかもしれない。しかしそれは、社会によってなんらかの仕方で意志と意識とをもって規制された割当てがすでに行なわれた後の、交換である。かくてこの交換は、いわば、社会的割当ての私的修正であり、主観的な気分や考量に従う私的行為ではあるが、経済学的分析の対象ではない。[ヒルファーディング、一九]

家計を同じくするもの間での財の遣り取りは「等価」であることを建前にしなくとも成立するものであり、その限りにおいて、ひとまず交換をめぐる剰余については問題にならない。交換をめぐる問いは、二つの独立した主体の間でのみ生じるものであると考えることができるのである。

このように、「交換」が独立した二つの主体の間でなされる行為であるという規定は、ドゥルーズ＝ガタリの剰余価値論を考える上でも、重要な契機となる。というのも、『アンチ・オイディプス』、『ミル・プラトー』と続くドゥルーズ＝ガタ

リの一連の「経済学批判」は、何らかの主体がはじめから独立したものとして与えられると考える手法自体を批判するものであったからである。ドゥルーズ＝ガタリにおいて、「主体」とはあらかじめ前提としてされるものではなく、ある象徴的な体系のもとに社会的な登録を付されることによって、はじめて生起するものなのだ⁽¹⁾。

だとするならば、「交換」とその「剰余」の問題を考えるにあたって重要となるのは、いかにして「交換」において「交換」に参与する主体が形成されるのか、という問題であることになるだろう。それゆえにこそ、ドゥルーズ＝ガタリの「経済学批判」において、「資本主義に先行する社会形態」を分析し各々の社会態における主体の社会化の有り様を分析することが課題として提出されることになる。

ドゥルーズ＝ガタリは、「経済学批判」におけるマルクスの問題設定を引き継ぎながら、構造主義的な人類学の分析を経た「原始社会」における「交換」の問題を分析する。人類学者の思考が陥りがちな「交換主義」を批判しながら、ドゥルーズ＝ガタリは、原始社会において「交換」とみなされているものが、実際には、社会的な登録による主体の生成にかかわるものであることを指摘するのである。

実際、社会を交換主義的に把握するとき前提とされる公準を受け入れる理由はどこにもない。社会とは、循環し循環させることを本質とするような交換の場ではない。そうではなくて、社会とは、しるし付け、しるし付けられることを本質とするような、登記の社会体なのである。[ACE, 166/175]

「交換」と見なされる出来事は、実際には社会的な登録である。ドゥルーズ＝ガタリは、「出自」と「縁組」という二つの「資本」の形態によって原始社会の構造を描き出し、社会の構造化がなされる過程における経済の流れを記述しようとすることになる。「出自」とはこの場合、ひとつの部族の系列における子の「生産」の過程であり、

「縁組」とは生産された子が他の部族との間に社会的な関係を取り結ぶことであるが、ここでドゥルーズ＝ガタリは、子が生まれた後、部族の系列の間で交換的に縁組が行われると考える方向を逆転させ、縁組による社会的な登録こそ出自に先行すると主張することになるのだ。

縁組 (alliance) を、出自 (filiation) から演繹するは不可能である。単に、ひとつの家系に属するひとびとを個体として扱う力を縁組に付与するのは、誤りであろう。縁組はむしろ、識別する力一般を生産するのである。[ACE, 171/179]

それぞれの個体が属する「出自」の系譜を第一に考えた場合、「縁組」という社会的登録（例えば、結婚による「女」の移動）は、異なる「出自」の系列をもつ部族間での「交換」の色彩を濃く持つことになる。実際、レヴィ＝ストロースをはじめとする人類学者は、そのように考え、部族間の女の交換という経済構造を取り出して見せたのであった。しかし、ドゥルーズ＝ガタリは、E・R・リーチのレヴィ＝ストロース批判を下敷きにしな

がら、出自に対する縁組の優位を説くことになる。リーチが指摘するように、カチン族のクランに属する首長たちは、自らの出自の系譜において、その「地位を維持するために他の首長リニエジ、すなわち他の首長の領地から女性をめとらなければならない」[リーチ, 150] が、それは、首長が、新たな「縁組」をすることによって部族間の社会的構造における自らの位置を守り、「このような婚姻によって大規模な政治的紐帯の基礎を形成する」[ibid.] ためなのであった。すなわち、首長は、自らの出自の系列を、より広範囲なクランの間の婚姻関係によって維持しているというわけだ。

こうした関係は、裏を返せば、婚姻に際して首長は、常に自らの地位を失う危険性を伴っていることになる。つまり、婚姻という縁組関係の規定は、常に新たな構造的布置を発生させるものであるのだ。実際、部族の間の争い、すなわち「血の復讐は、女性に関して始まる。典型的な場合、復

讐はマユ（女性を与えるもの）＝ダマ（女性を受け取るもの）の間で行われる」[リーチ, 153] といわれる。そして、争いの後、新たな部族間の社会的関係が規定されるのもまた、新しい「縁組」によってであることになる。「復讐の終わりは婚姻である、すなわち、マユ＝ダマ関係が復活するのである」[ibid.]。そうした「復活」は、それまでの部族間の社会的関係に大規模な変革を引き起すものであるだろう。リーチの指摘によれば、「縁組」の復活とは、「時に、敗れた集団がダマ小作人として勝者の土地に居住することを意味した」[ibid.] という。縁組をめぐる経済が、出自の系列の社会構造を常に潜在的に規定し続けることになるのである。

こうしたリーチの指摘を受けてドゥルーズ＝ガタリは、出自に対する縁組の優位を説くことになる。

こどもの生産において、こどもは、父の一族かあるいは母の一族かいずれかに選言的に登記される。だが、しかし、逆に登記されるこれらの一族の方は、父と母の結婚によって表される接続を介してしか、こどもを登記できないのである。だから、縁組が出自から派生することはできないことになる。そうではなくて、この二つのものは、本質的に開かれた次のようなひとつのサイクルを構成しているのである。すなわち、そこにおいて、社会体が生産に働きかけると同時に、生産が社会体に反作用を及ぼすような、ひとつのサイクルを。……出自が、規定されるものでありながら支配するものであるならば、縁組の方は、規定するもの、あるいはむしろ、規定された支配のシステムの中への規定するものの回帰を表しているのだ。[ACE, 172/180-181]

「生産」される子を特定の「出自」の系列へと帰属させることに先だって、「縁組」による社会的な登記がある。「縁組」とは、社会的構造を「規定するもの」にほかならず、構造化された出自の系列は、それによって「規定される」もので

あることになるのである。縁組の経済関係によって規定された出自の系列は、ひとたびそのように規定されることで、社会的な支配のコードとして機能することになるだろう。高い地位の出自の系列に属するものは社会的に高い地位をもつことになり、それに応じた生産の配分を受ける。コードがコードとして規定されている状況においては、コードをコードとして規定した力は背後に退き、幾何学的等価を形成するコードの秩序に対して常に「剰余」として存することになるのである。ドゥルーズ＝ガタリが「剰余」という概念に注目するとき、まず問題となるのは、こうした「コードの剰余価値」であることになる。

コードの剰余価値は、コードによって達成される秩序に常に内包されつつ、経済的基盤として、コードによる秩序の成立自体を可能にする。「〈それ〉は、調子を狂わすことによってしか作動しない」というドゥルーズ＝ガタリの定式は、そうした剰余の働きを示すものであるということができよう。コードによって「幾何学的な等価」が成立している社会において、そのような「等価」が保たれるためにも、コードの等価に還元されず、それゆえにコードの等価に対する不安定な因子となる剰余が不可欠であるのである。すなわち、「等価」は「不等価」によって成立するということができるのだ。

先の「交換」をめぐるアポリアは、こうしてドゥルーズ＝ガタリによって、社会的構造の規定の問題として読み替えられ、解決されることになるのである。

2. 剰余と消費

出自のストック

コードが刻まれることによって、それぞれの主体は社会の中に「相応のもの」として位置づけられる。一組の男女の結婚は、「女」を別な部族へ移動させ、将来「生産」されるべき「子」を特定の「出自」の系列の中へ刻み込み、部族の間に経済的な「負債」の関係を生じさせる。こうした一連の事柄は、原始社会のコードに照らして「相応」

であると見なされることで選択されることだろう。例えばカチンにおいては、男性はできるだけ高い婚資を払って、社会的地位の高い女性と結ばれることを是とするコードが存在する。そのように、コードがコードとして機能した結果、最終的に高い地位にあるものに財が集中することになる。「分析的観点からすれば、[婚資の]支払はまた、上位の地主に対する小作の小作料ともみることが出来る」[リーチ, 155]といわれるように、コードがコードとして人々の社会的関係を決定し、それに応じた生産が繰り返されることで、最終的に首長に財が集中することになるのである。

だが、コードに応じて配分され、その限りにおいて「幾何学的な等価」を保つ財の集中のシステムは、コードを規定する力なしには維持されることはないといわなければならない。「首長」が「首長」の地位にあることは、彼が現実に財を多くもっていることに基づくのではない。リーチが指摘するように、「威信は牛の所有からは生まれない」[リーチ, 155-6]のだ。そうした財の集中は、むしろ、「首長」が「首長」であることの結果であるといわなければならないだろう。コードがコードとして機能することによって、財の集中が達成されるのである。だとすれば、「そもそも」、なぜこのような財の不均衡が是認されるのだろうか。もしも首長が、集められた財をひとり貪ることになれば、周囲の満たされない者たちの思考は、コードがコードとして規定される根源的な地点にまで達することになりかねない。コードがコードとして機能する秩序の背後に潜在し、コードをコードとして規定する力の次元にまで、部族の成員の思考が至らないように、原始社会の首長は、それゆえ、そうした財の不均衡をできるだけ速やかに解消しなければならないと考えることになるのである。

連鎖から離脱したものは、生産の流れにおいて、一方には超過や蓄積を、他方には不足や欠如の現象を生み出すが、こうした不均衡は、代わりとして威信が獲得されたり、消費が分配されたりすることで、交換不可能な要

素によって償われることになる。[ACE, 176/184]

コードがコードとして機能することによって獲得される財は、最終的に首長のもとへと集められ、出自の系列に基づいた、富の「ストック」を形成するように見えるが、彼ら原始社会の首長たちは、そうして不均衡に配分される富を直ちに祓いのけなければならぬと考えることになる [cf. MP, 548/496]。「首長は婚姻や他の合法的な取引の結果として富を得ると、数多くまた大規模に宗教的饗宴（マナウ）を開くが、その饗宴の相伴にあずかる従者は利益をえる。…首長は華やかな饗宴開催という手段を通してこの消費的な富を不滅の威信にかえる。こうして財の終局的な消費者は元来の生産者つまり饗宴に出席する平民ということになる。…したがって構造的に言えば親族体系は非対称的にみえるけれども、全体組織は政治的および経済的に均衡がとれているのである」[リーチ, 155-6]。原始社会における「出自のストック」は、それゆえ、不安定なままに蓄積されるよりも、ほとんど消費されて「威信」へと交換されることになるのである。

だが、こうした原始社会体に対して、発生する「剰余」をそのまま「蓄積」することが可能な「別のアレンジメント」がありうる、とドゥルーズ＝ガタリはいう。マルクスが「アジア的な生産様式」と規定し、ドゥルーズ＝ガタリが「国家」という概念で引き継いだ、「帝国」のアレンジメントである。帝国の「専制君主」は、「神」を基点とする一元的な「出自」の系列に自らを連ねることによって、原始社会ではなしえなかった剰余の「ストック」が可能になるといわれる。では、そうした「国家」の構造を可能にするような経済とは、どのようなものであるのか。その点を検討することにしたい。

国家による超コード化のエコノミー

帝国による剰余の捕獲 『ミル・プラトー』において明示的に示されているように、古代帝国という、原始社会とは「別のアレンジメント」が出

現することによってはじめて、「ストック」の捕獲装置が本格的に稼働することになる [cf. MP, 555/500]。

ドゥルーズ＝ガタリによれば、「国家」において、すべての「土地」は統一的な視点からコード化され、まさにそのことによって可能となった土地の質的差異の比較により、「地代」という、土地の生産の剰余が捕獲されるシステムが構築されることになる。また、さまざまな人間の活動が、一般的に比較可能な「労働」へとコード化されることによって、国家のアレンジメントの中へと組み入れられことになるだろう。そして、国家による税制が統一的に構築されることによって、ストックとして長期保存に耐える「貨幣」が導入され、財やサービスとの間に等価関係を成立させることになる。

こうした一様なコード化の働きによって、帝国のアレンジメントは、コードに対する剰余をあらかじめ搾取されたものとし、すべての事物を「神」の一元的な「出自のストック」の系列に連ねることになるのである。

剰余のストック 原始社会において「ストック」は、その秩序を維持するために、直ちに祓いのけられなければならないものであった [cf. MP, 548/496] が、しかし、帝国のアレンジメントは、そうした財の集中を根源的に蓄積しつづけることに本義をもつことになる。だが、コードがコードとして規定される次元にまで問いをすすめ、社会のコード自体を規定するものへと思考が立ち返ることなく、財の不均衡が維持され拡大し続けることは、いかにして可能であるのか。そこに「国家」という社会態における特有の生産様式が存することになるのである。

しかし、例えば [萱野] のように、国家が国家として維持される要因を「暴力の蓄積」という点でおさえる考え方もありうるだろう。ドゥルーズ＝ガタリにおける国家の引き継ぎながら萱野は、上の問いに「より強力な暴力の蓄積によって」と答えた。まずは、その論点を検討することで、問題を整理していくことにしよう。

アーレントが提示する「権力」と「暴力」の差

異について自覚しつつ萱野は、なお暴力がコードとしての権力に一致する地点を描こうとする。アレントは、コードがコードとして機能する次元にある「権力」と、時に「権力」を得る手段として用いられる「暴力」とを区別したが、萱野は、自らコードとして現れる「暴力」を問題にすることで、その差異を「暴力」という概念に繰り入れようとしたといえよう。だが、「国家の暴力にさらされるぐらいならば、おとなしく従った方がましだ」[萱野, 102]といった類の「暴力と権力の一致」によって、国家においてコードがコードとして機能する状況を十全に記述できるかどうかについては疑問が残るといわざるをえない。とりわけ、パラノイア的に国家の秩序に固執し、国家の「正義」を守るため、時にすすんで自らの存在をも投げ出す人々の中に機能する「国家装置」の構造を、萱野の論は十分に説明できないと思われるのである。そうした国家の「成員」の存在自体を規定するものについて、あらためて「暴力」と規定することは十分に可能であるが、そうした場合少なくとも、「暴力」という、時に論理以上の説得力をもってしまう言葉について、さらなる分節が必要である。そして、そうした分節の際に重要な契機となるのが、「剰余」をめぐる「経済」の問いである。

剰余は、単にストックされるだけでなく、吸収され、消費され実現しなければならない。剰余の吸収という経済的要請はおそらく、帝国が戦争機械を所有するときの主要な一側面である。[MP, 561/505]

ここでの剰余の「吸収」は、民衆に対する税の徴収のことではなく、むしろ、そのようにして徴収されたもののストックが、いかに消費されるかが問題となっている。それゆえ、この文脈における戦争機械とは、国家が国民に対して税を徴収するためにもつ対内的な暴力であるよりもむしろ、それ自身において不安定な剰余を、国家の装置から離脱させることなく内部化するための装置であると解釈すべきであろう。すでに見たように、コー

ドがコードとして機能し、神に連なる一連の出自の系列が維持されるためには、「縁組」による経済関係（それはもちろん、単なるポリティカル経済ではなく、ドゥルーズ＝ガタリがいうようなリビドー経済を含むものであるのだが）の設立が不可欠の要素としてあるのであった。原始社会においては直ちに祓いのけられるべきものとされた財の不均衡が、国家の装置によって維持され、ストックされるものとなることを見るためには、それゆえ、ここでも「戦争機械」を、専制君主がそれによって新たに「縁組」を可能にするための、「超コード化」の機能を果たすものとして理解する必要があるのである。

「情け容赦ない殺戮の歯車装置を鍛え上げ、青銅の眼差しをもった芸術家である」[ACE, 236/242] 専制君主は、「一切の出自と縁組とを裁断し直して存続させ、それらをすべて〈専制君主と神との間の直接的な出自〉と〈専制君主と人民との間の新しい縁組〉とに集中させる」[ibid.]。この「英雄 (héros)」は、「一切の流れを超コード化するために」、「馬を駆って」「荒地 (désert)」に出で、既存のコードを超越した「新たな婚姻」を果たさなければならないだろう [cf. ACE, 237f./243f.]。こうして専制君主は、ひとつの「ファルス」へと収斂するシニフィアンの体系を作り上げ（極尽法）、「剰余価値が専制君主機械の超コード化を逃れないようにし始める」[ACE, 250/256] ことになるのである。

こうした過程によって、存在を刻み込まれた「国家」の「成員」は、神の一元的な出自の系列に連なる専制君主との間に縁組を取り結ぶことになり、結果として「縁組」による経済的な「負債」を「無限」のものとする。超越的な対象との縁組関係におかれることによって「国民」は、「存在」する限り返済しようのない「無限の愛」を、ただひとつの超越的な対象に対して捧げ続けることになるのである。こうして成立するパラノイア的な主体を、ドゥルーズ＝ガタリは、カフカのモチーフを引き継ぎながら、「犬」と呼ぶ。「犬たちが愛しているのは、死の本能が純粋に極尽法を用いて、欲望が法律に密接に結びつくこと」[ACE, 253/

258]である。「国民」は、専制君主を消尽点として一元的に確定される秩序が、まさにそうした秩序として十全に機能することを、互いに、そして自ら望むことになるのである。

このようなリビドー経済の構造によって、財の配分の構造的な不均衡は、根源的な問いを発せられないままに維持されることになる。神の一元的な出自の系列に連なる君主が発するコードは、それ自体として絶対であり、そのコードに基づいた財の配分の不均衡は、コードに照らして当然のものとして人々に受け入れられることになる。神に連なる出自の系列が支配する国家において、そこに生まれ落ちる身体は、他なるコード化の可能性に閉ざされたまま、不均衡を当然とするコードを、何の疑いをもつ余地もなく刻み込まれることになるのだ。国家の「暴力」が問題となるのは、まさにこうした点である。

国家の暴力の非常に特殊な性格はここから来る。いつもすでに成立したものとして現れるこの暴力を位置づけることは難しい。……この暴力は既成のものとして現れる。まさに欠損 (mutilation) はあらかじめのもの、すでに定められたものといわなくてはならない。[MP, 558-9/503]

国家のアレンジメントにおいては、既成のコードによる支配の体系が常にすでに先に成立したものとして与えられ、コードに対する剰余であるはずの潜在的な力は、あらかじめ奪われたものとして存在することになる。秩序が現実化し、幾何学的等価が成立した社会においては、コードをコードとして規定する「コードの剰余価値」は、国家の「成員」の身体からはあらかじめ奪われている。こうした剰余の搾取自体が隠蔽される構造こそ、帝国のアレンジメントに特有のシステムであると

いうことができるのである。

マルクスの社会態の分析が示すように、こうしたアジア的支配の構造に対して疑いを差し挟み、財の配分の不均衡を是正しようとしたのが、「市民革命」とよばれる出来事であったといえよう。神に連なる出自のコードを無効にし、新たな社会化の可能性を提示したのが、他ならぬ資本主義による革命だったのである。マルクスが「予見」し、それ以後の歴史が示すように、世界は資本主義のシステムを採用することになるだろう。しかし、マルクス、そしてドゥルーズ＝ガタリによれば、そうした資本主義においてもまたそれ特有の「剰余価値」の搾取の構造が機能していることになる。現代における身体のエコノミーを考察するにあたっては、まさにその点を問う必要があるわけであるが、しかしすでに紙幅は尽きてしまった。本稿においては、まずは資本主義に先行する社会態における「剰余」の様態を記述したところで、足早に筆をおくことにしたい。

《注》

- (1) この点についての詳細は、拙稿「荒谷」を参照いただきたい。

参考文献

- 本稿において参照された文献の略号は次の通り
 [A&E] G. Deleuze et F. Guattari, *Anti-Œdipe*, Minuit, 1972
 [MP] G. Deleuze et F. Guattari, *Mille Plateaux*, Minuit, 1980
 [荒谷] 荒谷大輔「出来の論理学——『アンチ・オイディプス』の哲学的基礎づけ」『情況』2003年7月号, 情況出版, 2003
 [萱野] 萱野稔人「国家とはなにか」以文社, 2005
 [ヒルファーディング] ヒルファーディング著, 岡崎次郎訳『金融資本論』上, 岩波文庫, 1982
 [リーチ] E・R・リーチ著, 青木保他訳『人類学再考』思索社, 1974